福津ふしぎ発見

掘切（ほりきり）と新規仕居（しんきしおり）の碑

今では田畑が広がる津屋崎地区、かつてそこには塩田が広がっていました。その塩田の設備が今もなお残されています。今月は掘切と新規仕居の碑を紹介します。

▲海岸から延びる「掘切」

市の北部、県道502号線から塩浜区の海岸に抜ける道沿いに、浜まで続いている「掘切」があります。掘切とは地面を掘って切り通した堀のことで、城や集落などへ外敵の侵入を防ぐ設備ともされます。しかし、市内にある掘切は水路として使われていました。

長さ約200メートル、幅約8メートルの掘切は、文政9年（1826年）に、当時あった塩田に海水を引くために作られました。潮の干満を利用して海水を通す仕組みになっており、海水を取り入れる口は、砂がたまって詰まらないように、堤防を築くなどの工夫が施されています。

また、掘切のすぐそばの松林の中には、「新規仕居」と書かれた碑が立っています。ここには、「文政9年丙戌（ひのえいぬ）年」などの文字が刻まれています。はっきりとしたことは分かりませんが、掘切が完成した後に建てられたものではないかと推測されています。

■発行　福津市　■編集　広報秘書課（福間庁舎）〒811-3293 福岡県福津市中央1-1-1　■印刷　久野印刷株式会社

UD FONT by MORISAWA